

北海道合鴨水稻会 水かき通信 第31号
2010年11月1日発行

北海道合鴨水稻会

水かき通信

もくじ

圃場見学会レポート	山田正紀（事務局）	1
事務局からのお知らせ		12

圃場見学会レポート

山田正紀（事務局）

2010年7月17日、第16回目となる圃場見学会が開催されました。担当は道南ブロックで、せたな町の諸戸農場と横山農場の合鴨圃場と、放牧酪農と乳製品の製造・販売に取り組む村上牧場を見学しました。参加者は、懇親会からの参加も含めて11名でした。今回は、諸戸・横山両農場での合鴨水稻同時作の実践状況を中心にしてレポートを行いたいと思います。

せたな町の概要

せたな町は渡島半島の日本海側に位置する人口約1万人の町で、主な産業は、イカ、ホッケ、アワビ、カキなどの水産業、水稻、じゃがいも、メロン、ほうれん草、豆類、酪農などの農業である。気候は対馬暖流の影響のため温暖であるが、夏場は涼しく30℃以上になる日は少ない。

諸戸農場

1. 経営の概要

諸戸農場はせたな町瀬棚区大里地区にあり、水稻＋牧草販売という経営である（写真 1 参照）。土地面積は水田 770a（所有 400a、借入 370a）と、牧草地 1500a（所有 700a、借入 800a）である。10 年前までは乳牛の子牛を購入し育成・種付けして販売していたが、現在、家畜は飼育していない。



写真1 諸戸農場全景

表1 諸戸農場の水稻作付状況

水稻品種	栽培方法	面積（うち合鴨）
吟風	有機	50a (50a)
ほしのゆめ	〃	85a (85a)
〃	YES!clean	150a
ななつぼし	〃	120a
おぼろづき	〃	85a
ふっくりんこ	〃	140a
きらら397	慣行	140a
合計		770a (135a)

水田には全て水稻を作付けしており、自宅近くの 135a が合鴨の有機である。この面積はここ数年変わっていない。この他に YES!clean が 495a、慣行が 140a である（表 1 参照）。水稻品種は全部で 6 種類である。合鴨田で栽培している品種は、酒米（酒造好適米）の吟風とほしのゆめである。この 2 品種が選ばれたのは、吟風は有機栽培米を原料にした日本酒を製造するためであり、ほしのゆめは合鴨水稻同時作を開始した 1998 年当時にもっとも食味が良い品種だったためである。むろん、現在はより良食味の品種もあるが、継続して購入してくれている顧客もいるので変えていないそうである。

2. 合鴨水稻同時作の実施状況

合鴨のヒナは、高橋人工ふ化場(大阪府)のものをせたなオーガニック倶楽部で共同購入しており、価格は運賃・農協手数料をふくめて 630 円/羽である。諸戸農場では、今年度は 120 羽購入した。農場着は 5 月 26 日で、例年であれば 5~6 羽のへい死が見られるところ、今年

は1~2羽のみで幸先のよいスタートが切れた。

なお、せたなオーガニック倶楽部とは、大里地区で合鴨水稲同時作に取り組む農家5戸によって構成された組織で、設立は1998年である。ヒナの共同購入のほか、米の共同販売を行っている。メンバーは全員が本会の会員で、高橋氏が代表を務めている。

田植えは6月2日に実施した。苗は中苗マットで、大里地区の6戸で共同育苗したものである。合鴨の水田放飼は6月6日。今年は東からの風が吹かず、稲の活着が順調だったため、例年より早かった。羽数は10aあたり10羽を目安としており、120羽を60羽ずつの2群に分けている。ただし、羽数が減少してきたら仕切りを外して1群としている(図1参照)。

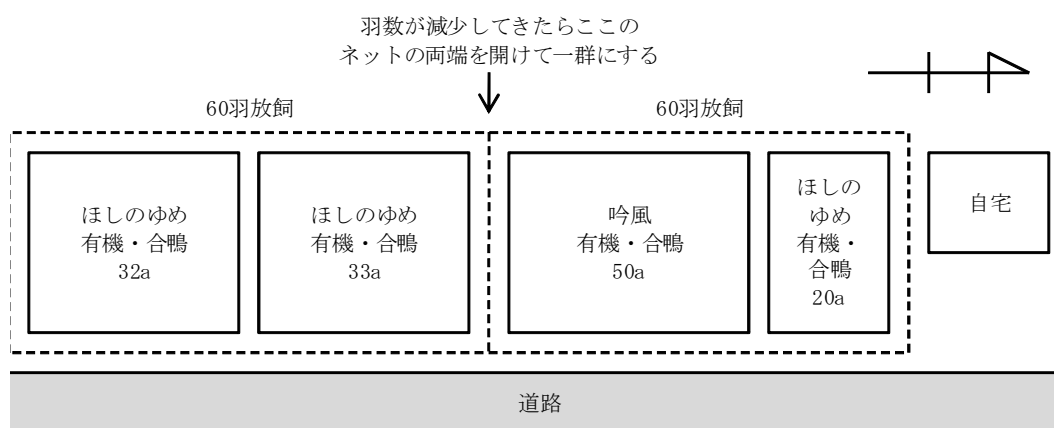


図1 諸戸農場の圃場図(部分)

注:点線はネットを示す

主な害獣・害鳥はタヌキとノスリで、今年は前者による被害が多かった。被害防止の工夫としては、電牧に安いソーセージをつけて電気の味を覚えさせる、威嚇用のロケット花火をすぐ手の届くところに用意しておく、合鴨の隠れ家になるようにあぜ道の草を少し残しておく、などがある。

放飼中のエサはクズ米と圧片大麦を混ぜたものである。調査日時点では12リットルを朝・晩の2回与えているが、エサやり時に寄ってくる様子を見て量を加減している。

除草は、調査日(7/17)までに機械除草を2回実施している(6/10、6/20)。除草機は隣の数戸で共同利用している(株)美善の「あめんぼ号」6条タイプである。例年であれば、これに加えて手取り除草を7月中旬に1回と、水を切ってから1回の合計2回行っている(調査日時点では未実施)。なお諸戸氏は近年、除草機について歩くのがつらく感じられるようになったので、今冬、中古で入手した(株)みのる産業の三輪式田植機を乗用除草機に改造する予定とのこと。

合鴨田には、肥料としてパール有機を元肥で20kg×5反、窒素にして6kg投入しており、追肥はしていない。収量は、ここ2~3年は慣行田と比べて1反あたりマイナス半俵ほどで、ほとんど差のない年もあるとのことである。特に今年は稲の生えてない「プール」がほ

とんどできていないので期待ができる。

鴨の水田からの引き上げは、今年は7月25日を予定している。引きあげられた合鴨は、すぐそのまま北檜山のそば店に無償譲渡される。

3. 合鴨米の販売状況

収穫された合鴨米（ほしのゆめ）はせたなオーガニック倶楽部を通じて「有機栽培米」として販売される。価格は精米10kgで4800円（送料別）である。注文の窓口は農協になっており、月に2回とりまとめて代表の高橋氏のところへオーダーが入る。商品は、玄米の状態農協倉庫に保管されており、倶楽部で所有する施設で精米したのち発送される。倶楽部のメンバーのなかには個人で販売している人もいるが、諸戸農場では倶楽部を通じた販売が主である。

吟風については、秋田県の高橋酒造で醸造され、せたな町特産の純米酒「吟子物語」となって販売されている。

横山農場（農園おりざ）

1. 経営の概要

横山農場は、諸戸農場と同じ大里地区にあり、2003年に新規就農した経営である。経営主の横山氏は以前、本州の養護学校に勤務していたが、自給自足の生活をめざして現在地へ新規就農した。家族構成は奥さんと小・中学生の子供3人である。自家消費用にめん羊と採卵鶏を飼育しており、合鴨と合わせることで肉・卵はほぼ自給できているとのこと。

土地面積は水田470a（全て借地）で、そのうち400aに水稲、のこり70aに大豆と牧草を作付けている。水稲品種別の面積はほしのゆめ288aとふっくりんこ112aであり、ほしのゆめのうち148aが有機で、さらにそのうちの51aが合鴨である（表2参照）。販売する米が不足しているため、本当ならば有機を増やしたいところであるが、農繁期の労働ピークが制約となって拡大ができない状況とのこと。また、水田から引き揚げた鴨が十分に利用できていないため、合鴨の面積は減らしている。

表2 横山農場の水稲作付状況

水稲品種	栽培方法	面積（うち合鴨）
ほしのゆめ	有機	148a（51a）
ほしのゆめ	YES!clean	140a
ふっくりんこ	〃	112a
合計		400a（51a）



写真2 横山農場の犬小屋と合鴨小屋

2. 合鴨水稲同時作の実施状況

横山農場で2010年に導入した合鴨ヒナの数は50羽であった。せたなオーガニック倶楽

部で共同購入したもので、ふ化場や価格条件については前述の通りである。農場到着日は5月26日で、合鴨田への田植えと同日であった。苗は中苗マットで、大里地区の6戸で共同育苗したものである。

水田への放飼は6月5日。羽数の目安は10aあたり10羽で、群分けはしていない(図2参照)。主な害鳥はタカとノスリであり、調査日(7/17)までに10羽ほどの被害があった。合鴨用の小屋を設置して夜間はそこに入れ、隣に犬小屋を置いているのでキツネやタヌキによる害はない(写真2参照)。

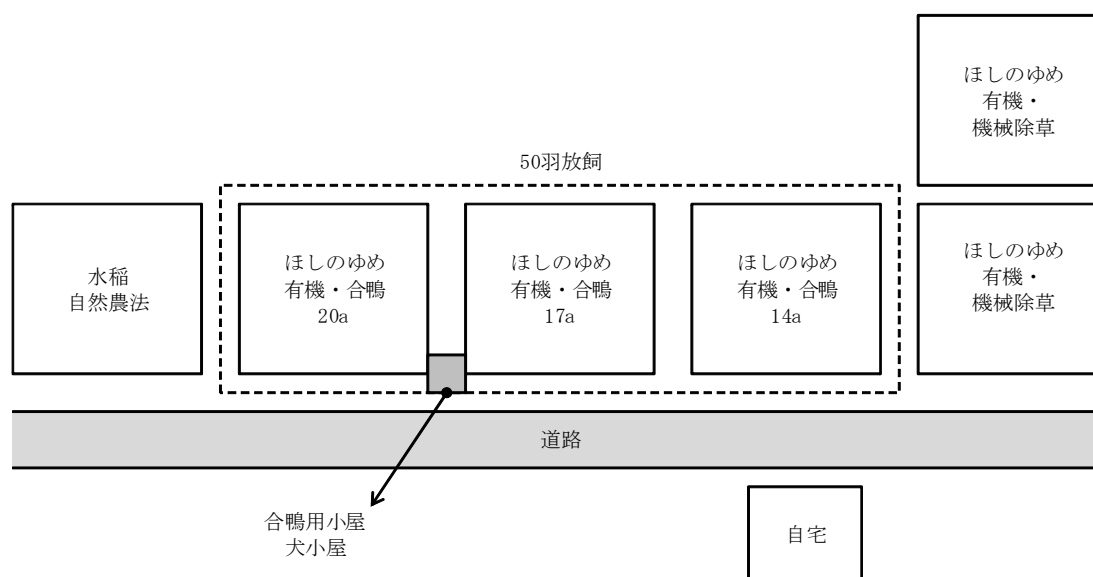


図2 横山農場の圃場図(部分)

注: 点線はネットを示す

合鴨田のそばにカラスの巣があるが、カモの放飼の時期がカラスの子育ての時期と重なるため、タカなどが接近するとカラスが警戒して騒ぎ、結果としてカラスがカモを守るという一風変わった関係になっている。なおカラスがカモを襲うことはない。

水田放飼中のエサは、クズ米に米ぬかを混ぜたものである。バケツに半分くらい、カモが小さい頃には朝、晩2回、大きくなってからは1回与えている。

合鴨圃場の除草作業は、調査日(7/17)までに機械除草4回、手取り除草1回をおこなった。除草機は諸戸農場の部分でも触れた共同所有の「あめんぼ号」6条タイプである。その他に4条のツメ回転タイプのものも使用している。手取り除草はあと1回行う予定で、合計2回になるとのこと。合鴨が雑草を食べるおかげで、機械除草2回分の手間が省けると評価している。

合鴨の引き上げは調査日の翌週になる予定。そのうち15羽は肥育して自家消費や贈答に利用するそうである。残りについては、去年は八雲町の知り合いに譲渡したが、今年は諸戸氏と同じそば屋に譲渡する予定である。

3. 合鴨米の販売状況

米の販売先は、せたなオーガニック倶楽部で販売する分と、個人販売の分があり、後者が主である（倶楽部の販売については前述のとおり）。個人販売の際には合鴨米と他の有機米を区別せず「有機」表示とし、「農園おりぎ」ブランドで販売している。顧客は個人需要が中心で、地域的には本州7：道内3ほどの割合である。

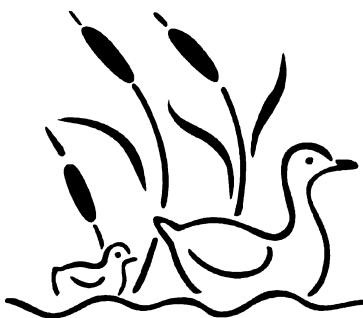
横山農場では、合鴨の他に、「自然農法」にも取り組んでいる。これは、「奇跡のリンゴ」の木村秋則氏が提唱している無農薬・無施肥による栽培方法で、わらを乾燥させてから利用することがポイントになるとのこと。

収穫後、秋のうちに溝をきって排水を促進し、さらにテッダをかけてわらを反転させることでよく乾かす。そして春にすきこむのである。現在のところ、自然農法田の収量は1反当たり4俵ほどであるが、技術が向上すれば8俵も可能らしい。

おわりに

今回の圃場見学会は、参加人数こそやや少なめでしたが、その分詳しくお話をうかがうことができ、非常に有意義なものになったと思います。村上牧場でうかがったお話もたいへん興味深く、広々とした牧草地を見下ろしながら食べるアイスクリームも美味でした。

そして夜は民宿「伏見屋」にて懇親会。ウニやアワビといった海産物が食べきれないほど出てくる豪勢な宴席となり、深夜遅くまで飲み・語りました。最後になりますが、今回、見学を受け入れていただきました諸戸さん、横山さんをはじめ、せたなオーガニック倶楽部の会長高橋さん、岡崎さん、平田さんにはたいへんお世話になりました。記してお礼を申し上げます。ありがとうございました。



事務局からのお知らせ

●年会費の早期納入にご協力ください

本会は会員の皆様からの会費によって運営されています。円滑な運営のために、早期の納入をお願いしております。年会費は3,000円です。

納入先：北海道合鴨水稲会

郵便口座番号 02700-3-38241

編集後記

残暑残暑と言っていたら、もはや秋がありませんでした。もう雪の便りが聞こえてくる季節、圃場見学会で太陽光にキラキラしていたのがついこの間だったはずなのですが・・・▼今号は圃場見学会の報告をお届けしました。例年に比べ幾分パワーアップしておりますが、お気づきでしょうか。事務局員庄子・山田と、今回参加した水産経営学講座の大串さんによる筆です（私は食べることに専門でした）。▼せたなでの晩御飯にびっくり。内陸育ちの私にとっては10年分ほどのウニを戴きました。アワビなど冠婚葬祭以外で食べたことはありません。いやあ幸せだったなあ。

(小板橋)

北海道合鴨水稲会 水かき通信 第31号

2010年11月1日発行

(連絡先) 北海道合鴨水稲会 事務局

〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目

北海道大学大学院農学院

共生農業資源経済学講座 食料農業市場学分野内

庄子太郎・山田正紀・小板橋正裕

TEL : 011-706-3858

FAX : 011-706-2470

e-mail : shoji-t@agecon.agr.hokudai.ac.jp

HP : <http://hokkaidoriceduckfarming.web.fc2.com/>